

設問番号	(1)
解答又は 解答例	新約聖書テキストの釈義の手順は、1. ギリシア語原典の試訳、2. 本文批評、3. 伝承と編集の分析、4. 各節の釈義、の段階を踏んで行われる。 1. 試訳は Nestle-Aland, 28.Aufl. (NA28) あるいは Greek New Testament, 5th ed. (GNT5)（予告されている NA29, GNT6 が刊行されればそちら）、また既刊部分については Editio Critica Maior (ECM) を用いて、ギリシア語原典をまず直訳する。その際、Bauer/Danker/Arndt/Gingrich (BDAG), Kittel (ThWNT), Liddell&Scott (LSJ)などの辞書と Blass/Debrunner/Funk (BDF), Kühner/Gerd (K.-G.), Smyth などの文法書を参照する。 2. 次に本文批評を行う。NA28, GNT5 の apparatus criticus を参照して釈義上問題となる本文の異読を検討する。その際、伝統的な本文型とその地域的広がり、個々の写本の信憑性のカテゴリー（K. und B. Aland, Der Text des Neues Testaments の写本リスト）、異読生成の家族関係による判断に加えて、ECM が刊行されてデータベースがある場合には新しい Coherence Based Genealogical Method (CBGM) の方法も用いる。 3. 釈義すべき本文が確定したところで、伝承と編集の分析を行う。共観福音書の場合、二資料仮説を前提としてコンコルダンスを用いて hapax legomenon やセム語法の有無、福音書記者の好む語彙、言い回し、文体などを調べる。書簡の場合、信仰告白伝承やキリスト讃歌など先行する口頭伝承の存在に留意し、福音書と同様、hapax legomenon やセム語法の有無、各書簡の著者の好む語彙、言い回し、文体などを調べる。語彙の統計に当該文書の著者の神学的傾向を併せて総合的に検討し、伝承の発展過程を検証する（伝承史的研究）。 4. 各節ごとに学術的な注解書を参照しながら釈義する。伝承と編集の分析の結果に基づいて、福音書の場合であれば、史的イエス、口頭伝承、福音書記者、書簡の場合であれば、口頭伝承、史的パウロあるいは偽名として使用されている著者の伝承、書簡の著者自身、それぞれの段階での文学的様式とそれに対応する歴史的、社会的、また共同体内部の具体的状況（「生活の座」）の再構成を試みる。そして、それぞれの発言の意図を考察する（様式史的研究、社会史的研究）。編集の最終段階である福音書記者ないし書簡著者の神学的構想を、狭い文脈、広い文脈、当該文書全体の構成に即して明らかにする（編集史的研究）。その際、特に物語が最初の読者にどう読まれる可能性があったか（物語論、文芸批評的研究）に留意する。
出題の意図	新約学の基本となる釈義の手順、その方法論と適用の仕方をどの程度把握し、身に付けているかを見る。本文批評、様式史、伝承史、編集史といった古典的な研究方法に加えて、社会史的研究、物語論、文芸批評的研究などにも言及できると良い。

設問番号	(2)
解答又は 解答例	1. 史的イエス 史的イエスの宣教活動、その業と言葉がイエスの人格に関わる待望、この人こそ私た

ちを救ってくれる人だ、という期待を惹き起こした。

2. 「神の国」

イエスの宣教の中心は「神の国」であった。「神の国 (ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ)」という表現はとても広い意味を持っている。イザ 52,7 では「良い知らせ (=福音) を伝える者 (מְבַשֵּׂר / εὐαγγελιστής ὁ μὲν οὖν)」が「あなたの神は王となられた」と告げる、と預言されている。この①「神が王であること、王として支配すること」が「神の国」という表現が表している根本の事態で、これは出来事を表す。ここから②その「王としての支配の及ぶ領域、王国」という空間的な意味にもなる。

3. 終末論的派遣意識

イエスはこの「神の国」、神が王として支配する事態が間近に迫っている、という間近な終末待望を同時代のユダヤ人の多数と共有していた（マコ 1,14-15; ルカ 17,20f.; 初期ユダヤ教、ソロ詩 17 参照）。それはイエスの理解では突然向こう側からやってくるものである（マコ 13,28-32）。彼は自分がその終わりの時に神の民、イスラエルを集めるために、神によって全権を与えられ、派遣されているという意識を持っていた（マタ 10,40-41; マタ 10,5-8 (エレ 50,6); ルカ 19,10 (エゼ 34,16))。

4. 終わりの時の食事共同体

そこでこの意識を持って、イエスはイスラエルの社会の周縁に追いやられていた人々に共同体における交わりを回復しようとした（マコ 2,15-17）。それは後ろ指を差されていた「罪人」たちと共に食事をする交わりの形を取り、終わりの時に待望されていた「神の国」におけるメシアの宴の先取りを意味する預言者的な象徴行動であった（マタ 14,31-21/マコ 6,32-44/ルカ 9,10b-17）。彼にとってはイスラエルの民の一部、たとえば宗教的なエリートのみではなく、あくまで全体が重要であった（イスラエル十二部族を象徴する「十二人」マタ 10,1/マコ 3,14/ルカ 6,13; マタ 19,28/ルカ 22,30; 「徴税人や娼婦たちが、先立ってあなた方〔祭司長や民の長老たち〕を神の国に導いて行く」マタ 21,31b）。

5. 神の国のしるしとしての治癒奇跡

さらにイエスは様々な病によって、宗教的に「穢れた」ものとされ、やはり社会の周縁に追いやられていた人々に触れて、彼ら、彼女らを癒した（マコ 1,40-45; 5,25-34 他多数）。それらの奇跡的な癒しは、接触によって穢れが移ると考えられていた当時の宗教的常識を覆すもので、常識とは逆に聖さがその支配領域を拡大していく出来事であり、神の国、神の王としての支配のしるし、予兆と見なされた（マタ 12,28//ルカ 11,20）。

6. 神の国に巻き込み、応答を促すたとえ

イエスは様々なたとえを語って人々を神の国と直面させた。それは、たとえを聞いた人々が「立ち帰って赦される」ため（マコ 4,10-12）、神との正しい関係に戻って救われるためであった。イエスのたとえは単なる言葉による説明ではなく、それによって新しい出来事が起こされる言語行為であり、神の国を「(布告使として) 宣べ伝える

	(κ η ρ ú σ σ ω)」、宣教の業、聞いた者を神の支配の領域に巻き込み、応答を促すものであった。 イエスの食事の交わりに入れられること、彼に触れて病から解放され、穢れが浄められ、社会復帰を果たすことは、終わりの時の救いの民に属することを意味した。このことを可能にしたのはイエスの奉仕である。それは具体的に、食事の給仕 (δ ú α κ ο υ é ω)、病人の世話 (θ ε ρ α π ε ú ω) であり、彼は徹底して僕として、仕える者として振舞った (ルカ 22,24-27; マコ 10,42-45)。
出題の意図	史的イエスの宣教の中心であった「神の国」について、具体的な聖書箇所を踏まえた包括的な理解を問う。前提としてのヘブライ語聖書の出発点、イエスの派遣意識、それに基づく彼の言葉（譬）と業（治癒奇跡）、「神の国」におけるメシアの宴の先取りとしての罪人たちとの共食、等々イエスの宣教活動の全般を「神の国」の視点でどこまで把握しているかを見る。

設問番号	(3)
解答又は 解答例	1. はじめに New Perspective on Paul とは、E.P.サンダース『パウロとパレスチナ・ユダヤ教』（原著 1977 年）が、従来の信仰義認論をパウロ神学の中心と見てユダヤ教を自己義認の律法主義的宗教と貶めるあり方に異を唱え、タンナイーム文献、クムラン文書、外典・偽典文書を読み直し、初期ユダヤ教を covenantal nomism 「契約律法主義」の宗教であると見極めたことに端を発し、パウロを紀元後 1 世紀の初期ユダヤ教の広がりの中で捉え直す新しい研究の潮流を指す。 2. 初期ユダヤ教の捉え直し プロテスタントのパウロ解釈の前提となっていたのは、ユダヤ教は律法を守ることによって救済が得られるとする、行為によって救いを獲得しようとする宗教であるというレッテル貼りであった。そしてその誤った律法主義に対してイエスが恵みによる救いという福音を説いたのだとして、律法と福音を二者択一に考え、パウロは律法主義を批判して「信仰による義」を教えたとする理解であった。しかし、ユダヤ教のラビたちがずっと主張し続けてきたことであるが、ユダヤ人が律法を守るのは、救われるためではなく、一方的に契約に入れられた者がその先行する恵みに感謝して喜んで行う応答の業であって、決して自らを義とするためではない。このことをサンダースは広範囲かつ緻密な資料の分析によって跡付け、初期ユダヤ教が契約律法主義に基づく宗教であることを明らかにした。律法の掟の遵守は救済の条件としての行為ではなく、先立つ神の選びによって成立した契約関係の内部で要求される従順の姿勢であり、それが契約共同体の成員としての地位を維持する。万一、掟を破ってしまった場合、契約関係から外れてしまうのであるが、その場合も悔い改めと贖罪の業を行うことによってその地位を回復することができ、その定めまで律法は規定している。 3. サンダースのパウロ解釈 この初期ユダヤ教の準拠枠の中でサンダースは、パウロが契約律法主義をキリストに

	よる新しい契約関係によって相対化していると見る。すなわち、キリストが到来した以上、律法による契約の維持は救いの中心ではなくなった、とパウロは考えている。その結果、ユダヤ人も異邦人も神の恵みでキリストに参加し、信仰によって神の民となり、割礼や食物規定はもはや神の民の条件ではなくなる。律法はキリストによって成就され、再解釈されることとなる。 4. ジェームズ D. G. ダンのパウロ解釈 サンダースの研究を受けて、ジェームズ D. G. ダンが"New Perspective on Paul," <i>BJRL</i> 65 (1983) 95-12 でこの視点を名づけ、この新しいパラダイムを広めた。ダンはパウロが語る $\epsilon\rho\gamma\alpha\ \nu\acute{o}\mu\omicron\upsilon$ 「律法の〔諸々の〕行い」（ロマ 3,28; ガラ 2,16）とは救済されるための功績のことではなく、ユダヤ人を異邦人から区別する boundary markers 「境界標識」、特に「割礼」「食物規定」「安息日」を指していると解釈した。パウロが義認論で問題としていたのは、異邦人がユダヤ人になることなく、どのようにして神の民に入れられるのか、どうすればユダヤ人と異邦人の共同の食事が可能となるのかであったのだという。 5. N.T. ライトのパウロ解釈 N.T. ライト（『新約聖書と神の民』原著 1992 年、『使徒パウロは何を語ったのか』原著 1997 年、他）はさらにこの議論を共同体の視点で拡大した。ライトによればパウロの義認論は、個人がどうすれば救われるかだけでなく、誰が神の契約の民なのか、という教会論的な問題でもある。そこでライトは、$\delta\iota\kappa\alpha\iota\omicron\sigma\acute{\upsilon}\nu\eta\ \theta\epsilon\omicron\upsilon$ 「神の義」、$\delta\iota\kappa\alpha\iota\acute{\omicron}\omega$ 「義とする」、$\pi\acute{\iota}\sigma\tau\varsigma$ 「信仰」といった中心概念を、個人の救済の問いとしてだけでなく、神の契約と新しい神の民の形成という共同体の視点で読み、義認を契約、法廷、終末、キリスト論という四つの枠組みで捉え、$\pi\acute{\iota}\sigma\tau\iota\varsigma\ \chi\rho\iota\sigma\tau\omicron\upsilon$ を「キリストを信じる信仰」だけでなく、文脈によって「キリストの信の姿勢、神との誠実な関係」と解釈する。 6. 最近の傾向と新約学の研究動向 最近では New Perspective on Paul からさらに進んで、パウロをより強く初期ユダヤ教の内部に位置づける Paul within Judaism の方向に研究は進みつつある。Pamela Eisenbaum, <i>Paul Was Not a Christian</i>, 2009 や Mark D. Nanos/Magnus Zetterholm (ed), <i>Paul within Judaism. Restoring the First-Century Contest to the Apostle</i>, 2015 など参照。このパウロ研究の新しい傾向は、戦後、クムラン文書の発見、ラビ文献の編集史的研究などによって初期ユダヤ教の多様性が明らかとなったことや、ユダヤ教とキリスト教の対話が進んだことなどから、パウロだけでなく、史的イエスやマタイ福音書の共同体をはじめとして新約諸文書成立のユダヤ教的な文脈がますます真剣に受け止められるようになっている新約学全体の研究動向と軌を一にしている。
出題の意図	ここ半世紀、新約学に大きなパラダイムシフトをもたらした New Perspective on Paul 「パウロに関する新しい視点」の理解を問う。E.P. サンダースによる初期ユダヤ教の捉え直し、J.D.G. ダンの boundary markers 「境界指標」に着目する解釈、

	N.T. ライトによる教会論的な共同体視点への議論の拡大が重要なポイントとなる。
--	--